

おそろい兄妹2 くらとアキくら (試読版)

登場人物

生島ハル……高校三年生の男子生徒。

生島アキ……ハルの妹。

生島冬美……ハルの継母にして、アキの実母。

長谷部志保……心理カウンセラー。



序
おねしょ病院

生島ハルの病室に若い女性看護師が訪れたのは、入院した翌日のことであった。

看護師は両手に抱えた衣類を示して、

「さっき説明があった通り、『これ』に着替えてもらうわね。まずは服を脱いで」

「はい」

ハルは緊張した面持ちで、シャツパジャマを脱ぎ始めた。

色はピンクで、サイズは女性用のM。この大病院の売店に置いてあるものだった。本当なら男物がよかったのだが、身長一六〇センチ足らず、男子高校生としては細身で華奢なハルの体には合わなかったため、やむなく女性用を着用することになったのだ。

慣れない左前ボタンに苦戦しながら、上着を脱ぎ、ズボンも脱ぐ。ピンクのパジャマを着ているときも少女めいていたが、脱いでもなお、ほっそりとした体は胸のない少女のようであった。

それでもさすがに少年で、若い女性看護師の前で全裸になるのは抵抗があるらしい。トランクス一枚で看護師をちらちらうかがっていると、

「気にしなくて大丈夫ですよ、私たちなら、見慣れていきますから。それでも恥ずかしいなら、脱ぎ終わるまでカーテンを閉めておきましょうか」

「ええと、じゃあ、お願いします」

看護師は笑って、外から病室のカーテンを閉める。個室なので他の患者の目は気にしなくていいのだが、たとえ看護師相手でも、誰かに見られているのは恥ずかしい。

(いや、このくらいで、恥ずかしがってなんかいられないんだ)

(ぼくはこれからもっと、恥ずかしい思いをしないといけないんだから……)

ハルは何度か深呼吸をして、呼吸を整え、覚悟を決めて、トランクスを脱いだ。

(なんで、あんなことが……)

(「あれ」さえなければ、こんな恥ずかしい思いをしなくて済んだのに……)

思い出すのは、一か月前。

はじめて「あれ」がハルの身に襲い掛かった時のことだった――

* * *

夏休みも終わりに近づいた八月下旬。

冬に受験を控えていることもあり、遅くまで勉強をしていたハルは、とつぜん太腿のあたりに、まるでぬるま湯をこぼしたような生温かさを感じた。みるみるうちに、その感触は太腿全体に広がる。

(な、なに……?)

ハルは驚いて自分の体を見下ろし——絶句した。

「えっ……」

パジャマがわりにしているスウェットのズボン。その太腿のあたりが、びっしりと濡れて貼りついていて。熱い液体が尿道をちよろちよろと通り抜け、パンツから服へと溢れてじわじわと漏れ続けている。

「う、嘘っ……」

慌てて立ち上がると、スウェットに吸いきれなかった雫がふくらはぎのあたりに垂れてきた。指でなぞられているようなくすぐったさに、ハルはまた小さく悲鳴を上げる。

「な、なんで、これ——」

べつとりと濡れたズボンを見下ろして、ハルは呆然と呟いた。尿が流出する感覚はなくなったが、それでも濡れた感触は消えなかった。

どんなに信じられなくても、この状況で思いつく答えは一つしかない。

「おもしろし、しちゃったのか、俺……?」

ハルはしばらく、べつとりと肌に張り付くスウェットの感触もそのままに、じっと立ち尽くした。

下の階からは妹の泣き声が、奇妙に遠く響いていた。

* * *

「ぬ、脱ぎました……」

「はい」

ハルが全裸でベッドに腰掛け、股間を手で押さえながら声をかけると、看護師がカーテンを開けた。彼女は表情一つ変えずに、

「じゃあ、ベッドの上に仰向けになってください」

「はい」

言われたとおりに、ハルはベッドに仰向けに寝転がった。両手はまだ、股間を押さえたままだ。

看護師は、持ってきたポットからお湯を出して器に注ぎ、太い筆のようなものでしゃしゃかとかきまぜている。ハルはその光景に、見覚えがあるような気がした。

「膝を曲げて、両脚を広げてくれる?」

「え、ええと、こうですか……?」

膝を曲げ、ゆっくり左右に開く。手で股間を押さえたままなので、何とも間抜けなポーズだ。

看護師はくすっと笑って、

「はい、ありがとうございます。でも、そろそろその手はどけてもらえないかしら。大丈夫ですよ、すぐに済みますから」

「うっ……わ、わかりました……」

ハルは真っ赤になりながら、ゆっくりと手をどけた。

ほっそりとした体にふさわしく、優しい陰毛に覆われたペニス。皮をかぶっていて、平均サイズよりはやや小さいが、緊張と恥ずかしさで萎縮しているせいもあるだろう。

「うん、ありがとうございます」

看護師は笑顔のまま、ベッドのすぐわきに立ってハルを見下ろした。

少年の性器に対しても顔の筋肉一つ動かさず、相変わらず小さな器に筆をいれて、しゃかしゃかと泡立てている。そしてすぐそばの台から剃刀を取り上げて、

「じゃあ最初に、おちんちんのまわりの毛を、ぜんぶ剃っちゃうわね」

「……え？」

ハルは目を丸くして、彼女の手には輝く剃刀を見た。

「な、なんで、陰毛を……？」

「だって、これから『あれ』をつけるんでしょう？ ちゃんと剃っておかないと、そこからかぶれたりして大変ですから。きちんと処理しておくようにって、先生から言われませんでしたか？」

「そ、そういうば、そんなことを言われたような気も……」

「まあ、こんなことになってしまっただけは無理ありませんけど」

看護師は同情的に、

「でも、すると決めたからにはちゃんとやらないと、ね。生島くん」

「は、はい……」

ハルは緊張に喉を鳴らした。

（そうだ、ぼくは、するって決めたんだ……）

（冬美さんに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。だから……）

覚悟を決めて、目を閉じる。こうなった以上、もうまないたの鯉なのだ。それでも、後戻りできない不安と羞恥に、全身がガチガチに強張った。

「そんなに緊張しないで。大丈夫、すぐに終わるからね」

看護師の声とともに、とっぜん、ペニスのまわりに細かな泡が塗りつけられた。

「ひゅっ!？」

反射的に背筋がのけぞる。ふうわりとした泡が、陰茎の根元から玉袋、さらには会陰部にかけて、刷毛のようなもので念入りに塗りとくられていくのだ。同時にハルは、先ほど看護師が持っていた器と筆を見たときに感じた既視感の正体に思い至った。理髪店で、髭を剃るときに使うあれだ。

「んっ、あうっ、はあっ……」

得心している間にも、陰部全体を覆い尽くすようにシェービングクリームが塗られて行く。くすぐったさと恥ずかしさに頬が紅潮し、熱を帯びた喘ぎが妙に色っぽい。

それを見つめる看護師の目が、次第に妖しい色を帯び始めた。

「さ、それじゃあ、剃っていきますね」

看護師は刷毛を剃刀に持ち替えて、左手でハルのペニスをつまみ上げた。

「んっ……」

竿の半ばほど——ちようど陰毛が生え始めているあたりに剃刀があてがわれ、冷たい刃の感触に、ハルは身をすくませる。

そして次の瞬間——

じよりじよりっ、

「っー」

陰毛が剃り落される音と感触に、ハルはきつく目を閉じた。単に体毛を除去されたというだけではなく、何か男として、少年として大切なものを喪ったような感覚だった。

裸以上に、裸にされる。

髪を切られて力を喪った英雄のように、陰毛が剃り落されていくにつれ、どんどん自分が無力な存在になっていく感覚。

じよりじよりっ、

じよりじよりっ、

剃られた陰毛が剃刀に絡みつき、肌の上を滑る。看護師は時折、タオルを使って剃刀をぬぐい、剃り跡を綺麗にする。指で陰囊のしわを伸ばし、会陰部にまで刃をあてがいながら、剃刀で細かい部分の陰毛も剃っていく。

そうして一〇分ほどが経過したとき——

「……うん、これで大体、剃れたみたいね」

看護師の声に、ハルはうっすらと目を開けた。

頭上には、優しく微笑む看護師の顔。その手には、丸められたタオルと剃刀が握られてい

る。「ほら、生島くん。すっかり綺麗になったから、見てごらん」

声に促され、恐る恐る、視線を自分の股間に向ける。

そこには、見るも無残に体毛を剃られた分身があった。

よほど丁寧にやったのか、毛根も残さずに剃りあげられ、包皮に覆われた竿や、陰囊が、情けないほどに綺麗な肌色を晒している。

「う、ううっ——」

いや、見るまでもなく判っていたことだった。薄いとはいえ、陰部を覆っていた陰毛の感触がすっかり消え、それどころか剃ったばかりの肌は敏感になって、わずかな空気の揺らぎさえも肌寒い。

ハルがこみ上げる羞恥に悶えていると——

「さ、次のステップよ。生島くん、もうちょっとだけ、我慢してちょうだいね」

看護師はそう言って、薄い缶を取り上げた。蓋を開け、別の容器から取り出したパフに、缶の白い粉を優しく取り出していく。

（なんで——どうして、こんなことに——）

ハルは、呪うように呟いた。

* * *

——嫌な夢を見た。

ハルは緩やかに浮かび上がる意識の中で、薄目を開いた。

薄いカーテンをかけただけの窓は昏く、夜明けがまだ遠いことを示していた。ベッドわきのキャビネットに置かれた時計は、まだ四時にもなっていない。

（変な時間に、目が覚めちゃったな……）

（ストレス……かな……）

さいきん、悩みの種が尽きない。

家庭の事情。

妹の夜泣き。

受験のこと。

そして——数日前の、おもらし。

思い出すと、いまでも背筋が寒くなる。

あれ以来、おもらしはしていない。こまめにトイレに行くようにして、水も飲まないようにしている。夏の暑さで水分補給を怠るのが危険なのはわかっていたが、それでもおもらしするよりはましだ。

尿意を感じる間もなく、下半身が生暖かく濡れるあの感触。

思い出すだけで、自分が今まで信じていた世界が崩れ去るような恐怖があった。

（俺……どうなっちゃったんだろう）

（いい年しておもらしだなんて……こんなんじゃ、アキに笑われちゃうよ）

アキは一年ほど前にできたばかりの、ハルの妹であった。普段はおとなしくて可愛いのだが、夜泣きとなると火が付いたように泣きはじめる。そのせいでこのところ、慢性的に寝不足だ。

考えれば考えるほど憂鬱になってきて、ハルは布団の中でため息をついた。

(きつと夢見が悪かったせいだ)

何も考えず、寝直そう。そう思って、寝返りを打った時だった。
ぐしより。

不意に股間に波打った生温かく湿った感触に、ハルの全身から血の気が引いた。

そのまましばらく、金縛りにあったように動けなくなる。

「あ——」

悪夢の続きに迷い込んだような恐怖が、心臓をわしづかみにした。

(まさか、そんな——)

確かめるのが、怖い。

それでも、恐る恐る手を伸ばして、パジャマがわりのスウェットに触れ——

(ぬ、濡れてる……!)

指先には、冷たく濡れた布がべつとりと肌に張り付いている。指先やズボン、太腿だけではない。お尻の下にも、血の凍るような冷たさがあった。

「ひっ——」

ハルは悲鳴を上げて、ベッドから転がり落ちた。下の部屋に足音が響くのも忘れ、電気をつける。

明るくなった室内に、惨状があらわになった。

部屋の奥、窓際に置かれたベッドの敷布団に、黄色いしみが広がっていた。掛布団にも、点々と汚れがついている。

視線を落とせば、スウェットの太ももも濡れている。膝まで垂れていない代わりに、お尻側がぐっしりだった。アンモニアの匂いが、狭い室内にむっと立ち込める。

(おねしょ……しちやっただ、俺……)

「急にばたばたして、どうしたの、ハルくん——」

入り口ドアの向こうから、心配そうに話しかける冬美の声。

それに返事することも忘れ、ハルはひたすら、目の前の光景が悪夢であることを願いつづけた。

* * *

妙に甘い匂いが、鼻をつく。

パフにまぶされた白い粉の匂いだ。それがハルの股間にはたかれて、あたりに白い霧となつて舞い上がるたびに、甘く切ない、しかしどこか居心地の悪くなるような香りが立ち込める。

その粉の正体を、ハルは知っていた。

タルカム・パウダー。

ベビー・パウダーとも呼ばれていて、赤ちゃんのおむつかぶれを防止するための粉だ。

(まさか、ぼくがつけることになるなんて……)

妹の世話でおむつ交換をしたときに、何度か使ったことがある。パフに粉を取って、おしっこを拭き取ったところにばふばふとはたくのだ——ちょうど、いまハル自身が看護師からされているように。

(こんなことって……)

「かぶれるといけないから、念入りにはたきましようね」

看護師はそう言つて、すでに粉まみれになっているハルのつるつるペニスをつまみ上げ玉袋の裏側まで念入りにはたく。

ばふっ、ばふっ、

「んっ……」

赤ちゃん扱いされているような恥ずかしさに、ハルは小さくうめいた。

ただでさえ体毛を剃られたばかりで、敏感になつている陰部。そこを柔らかいパフではたかれ、妙に郷愁を誘う甘いにおいが鼻をつく。

少女のような外見とはいえ、ハルも一八歳の少年である。竿から陰囊、会陰部にかけて執拗にパフの愛撫を受けると、恥ずかしさやくすぐったさとは別の理由で、腰の奥がむず痒くなつてくる。

ばふっ、ばふっ、

ばふっ、ばふっ、

「はあっ……」

ハルの口から、これまでとは違う喘ぎ声が漏れた。頬が紅潮し、つるつるにされたばかりのペニスが、ひくひくと痙攣しはじめる。

(か、感じちゃつてる……?)

(そんな……赤ちゃんみたいにパフではたかれてるのに、こんな、昂奮するなんて……っ！)
湧き上がる快感を、ハルは必死に否定する。

しかし心がどんなに拒もうとも、体は正直だった。

「あら、生島くんったら」

看護師の口調が、粘り気を帯びた。彼女の指は、ハルのペニスが次第に強張り、大きくなっているのをしっかりと感じ取っていた。

ハルは慌てて、

「ち、ちがうんです、これは……」

「ふふっ、恥ずかしがらなくても大丈夫よ。男の子なんだから。そうなっちゃうのは仕方ないわ」

「ううっ……」

「さ、おちんちんのまわりはおわったから、お尻にもはたかないとね。両足を上げてちょうだい」

「は、はい」

寝転がった姿勢のまま、腹筋を使って両足を掲げる。すると看護師の右腕が、上から絡みつくように膝を支えて、ぐっとお尻を浮かせる。そしてそのお尻に、柔らかいパフをはたき始めた。

その体勢だと、当然ペニスがハルの顔に近づく。まさに裸んぼうに剃りあげられ、白い粉をはたかれた竿が、ちよっぴり屹立しているのを直視してしまう。

羞恥心を煽る光景とベビーパウダーの匂いに、ハルがきつく目を閉じていると――

「さ、終わったわよ」

看護師は両足を支えたまま、そう言った。左手のパフを入れて来た容器に戻し、テーブルの上に置かれたものの中から、あるものを取り上げた。

「それじゃあ、生島くん。これ、つけるわね」

「そ、それは……」

恐る恐る開いた目に映ったものに、ハルはまた絶望の表情を浮かべた。

横棒の両端が細くなった丁字状のもの。表の生地はピンクにウサギのプリントがされていて、裏地は柔らかなベビーニット。その間に防水布が張られているため、妙にごわごわした質感だ。白いテープを巡らせた外周の内側に、ところどころゴムが入っているせいか、あちこちが歪んでしわになっている。

それがいったい何なのか――見間違えようがなかった。

サイズこそ、ふだんハルが見ているものよりはるかに大きいですが、その形状は紛れもなく――

「ええ、おむつカバーですよ。これからしばらくの間、ずっとこれをつけることになるから、だんだん慣れていかないとね」

看護師の笑顔に、ハルの背筋が凍りついた。

生島ハルがその大学病院を訪れたのは、初めておもらししてからちようど一週間前のことであった。

検尿や血液検査など一通りの事前検査が済み、ようやく診察室に通されたハルを出迎えたのは、若い男性医師だった。

彼は淡々とした目をハルに向け、まずこう言った。

「失禁も夜尿症も、青少年にはしばしばみられる症状です。恥ずかしがらず、率直に症状を伝えてください」

「はい」

ハルはうなずき、聞かれるままに、初めて失禁したときの状況を説明した。

聞き終えた医師は時折カルテにペンを走らせながら、

「なるほど。夜尿症は？」

「夜尿……？」

「睡眠中の失禁症状——平たく言えば、おねしょのことです」

「は、はい。おねしょも、何度か……」

ハルは恥ずかしそうに言う。

単におもらしただけだったら、こうして病院に来ることはなかっただろう。こまめにトイレに行き、水分摂取を少なめにしていれば回避できないことはない。

しかし、おもらしから数日後におねしょまでしてしまったため、ついに医者のお世話になることを決意したのである。

ハルはちらりと、横をうかがった。

隣には、まだ三〇前の女性が座っていた。すっきりとした細面に、豊かな黒髪をうなじで折り返し、ヘアクリップでまとめている。いまは質素ななりだが、和服を着せたらさぞ似合うだろうと思わせるような、古典的な日本美人であった。

姉ではない。彼女は、ハルの母親——生島冬美だった。

腕の中には、まだ八〇センチにも満たない少女が眠っている。ハルの妹の、アキだった。髪はまだ伸びきっておらず、冬美の胸元をぎゅっつつかんでいた。

（冬美先生やアキに、迷惑をかけるわけにはいかないから——）

そんなハルの懊悩を断ち切るように、医師は事務的な声で話を進める。

「まずは検査の結果から申し上げますと、生島くんの体におおむね問題はありません。やや膀胱が縮小していますが、ただちに問題になるほどではないでしょう」

深刻な病気ではないわけだ。ほっとする半面、別の問題も持ち上がってくる。

「では、どうして……」

「おそらく、メンタルの問題かと思われます。強いストレスを感じると、脳の機能が正常に働かなくなり、失禁することがあります。たとえば恐怖や、緊張ですね」

医師はここで一拍おいて、

「おそらく生島くんには、日ごろから強いストレスがかかっているんでしょう。それが脳の働きを阻害して、失禁、夜尿症といった症状になっているものと思われます」

「ストレス……」

ハルはうつむいた。

心当たりは、充分にあった。家族関係や寝不足のせいでも、まるでストレスを感じていないと言えばうそになる。また、それを家族に言わないでいたのも、ストレスを助長したのかもしれない。

しかしだからといって、すぐにおねしょやおもらしをするほどのものとは思えないし、だいいち、それで冬美たちに迷惑をかけては本末転倒だ。

隣では冬美も、紅唇を噛んでいる。

「たしかに最近、いろいろとこの子にとってつらいことが続いているかもしれません。アキが生まれたのも……」

「冬美さん……」

冬美は腕の中で眠る少女を抱きなおした。

「けど、そんなストレスを感じたからって、すぐに失禁したり、おもらししたりするものなんでしょうか？」

「ストレスに対する反応がどのようなものになるかは、人によって千差万別なんですよ。暴力的になる人もいる。鬱になる人もいる。過食、衝動買い、睡眠障害、オーバードースや自傷行為に走る人もいる」

「はい……」

「あいにく私の専門はフィジカルな部分ですので、メンタルな問題については、これ以上もい仕上げられません。かわりに、こういう問題に関して専門的な知識を持つカウンセラーを、ご紹介いたします」

「カウンセラー、ですか？」

「ええ。独特の方法論を持っている外部のかたなのですが、実績はあります。お二人さえ良ければ、これからすぐに面談の予約を入れますが――」

* * *

「一枚、二枚、三枚、四枚……」

看護師の声が、病室に響く。

まるで「番町皿屋敷」の一場面のようなのだが、数えているのは皿ではない。ハルのお尻の下に敷きこまれたおむつカバーの、その上に重ねているドビー織の布おむつであった。

一枚は横羽に合わせるように腰の下に垂直に敷き、その上からT字状に布おむつを重ねていく。こちらは直接股間に当たる部分なので、一枚では足りない。看護師は合計四枚を、おむつカバーの上に重ねておいた。

「さ、お尻を下ろしますね」

「う、うん……」

ハルが震える声で答えると、看護師の右腕に支えられていた両足がゆっくりと下降する。それに伴ってお尻も下がってゆき、ドビー織の、ざらざらしていながらふんわりと柔らかい感触が、お尻の下に感じられた。

「は、あつ……」

お尻が完全に落ちた瞬間、ハルの背筋を、いくつもの複雑な感覚が走り抜けた。

羞恥と充足。

絶望と安堵。

沈鬱と高揚。

一体どちらが自分の本心なのか——心に渦巻く無数の感情に、ハルは唇を噛む。

「おちんちん、下向きにするわね」

「んっ……」

看護師の手がハルのペニスをつまみ、ぐっと下向きに押し込む。

「んあっ!？」

ハルの口から、うめき声が上がる。軽く勃起しかけて上向きになろうとする力がかかって、いる竿を、強引に下向きにさせられて、痛みが走り抜けたのだ。

「あら、これじゃあおむつを当てられないわね」

看護師は困ったように言う、が——

「仕方ないから——こうしてあげましょうか」

一転してにんまり笑うと、

ずる、

とハルのペニスの包皮を剥いた。

「ひいっ!？」

ハルは少女のような悲鳴を上げて、全身を硬直させた。

* * *

「——なるほど」

医師から紹介された心理カウンセラーは、話を聞き終えるとそう言った。

長谷部志保と名乗ったその女性は、冬美とほぼ同年代であった。ふんわりと肩までウェーブした髪と、黒いフレームの眼鏡が特徴的な美人。鼻梁が高く、中東の血が入っているのではないかと思わせるような、エキゾチックな雰囲気があった。

彼女はハルの診察記録と、家族全員の病歴などを記したファイルを、怪訝そうな表情でチェックしながら聞いていた。やがてファイルから目をあげると、

「症状は失禁と、夜尿症と。では最初に、家庭環境から教えてくれるかしら？」

「は、はい」

問われるままに、ハルは志保に対して説明を始めた。

そうして三〇分ほどの聴取ののち——

「なるほど。どうもそのあたりに、原因がありそうですね」

志保は重々しくうなずくと、二人に真摯な視線を向けた。

そして彼女の口から、ハルの失禁の「原因」と、それに対する「治療法」が語られた。それを聞いた時、ハルは思わず耳を疑い、隣にいた冬美が、険しい顔で志保を睨むように見た。

「あの——そんな方法しか、無いんでしょうか」

切りつけるような冬美の口調にも、志保は涼しい顔で、

「私が考え付く限り、これが最も確実で、かつ速やかに治療可能な方法です。いままでも何例か、この方法での治療には成功しています」

「でも……だからって……」

「待って、冬美先生」

ハルは震える声で、冬美を制した。

「ぼく——それで、いいよ」

「でも、ハルくん。あんな方法——」

「いいんだ。これ以上、冬美先生に迷惑をかけるわけにはいかないし。専門家が、それが一番いい方法だって言うなら」

「ハルくん……本当に、いいの？」

「うん。受験も近いし、早く治さないと……」

悲愴な声で呟くハルに、冬美はそれ以上何も言えなくなる。

「決まりね」

長谷部志保はうなずいて、

「それじゃあこのあと、検査入院から専用の病室に移って、専門のスタッフが『治療』を開

始めましょう。その間、奥様には今後の『治療』方針について、私から説明させていただきます。——それで、よろしいでしょうか？」

* * *

それから、三時間後のこと。

ハルは病室で、看護師の手によってペニスの包皮を剥かれ、露出した亀頭をひたすら指先で弄りまわされていた。

「や、やめてくださいっ、こ、こんなことっ……!」

弱々しく抵抗しながら何とか両手で看護師の手を払いのけようとするのだが、指は蛇のように絡みつき、起き上がりとしても足腰に力が入らない。自慰もしたことがないほどうぶではなかったが、自分自身の手でコントロールするのではなく、他人によって快楽を引き出され、支配される屈辱に、ハルの顔が真っ赤に染まる。

「んっ、やっ、なんでっ、こんなことっ……!」

「なんでって、『治療』のために決まってるじゃない」

看護師は執拗に亀頭をいじめながら、平然と言い返した。

「長谷部さんから、お話は聞いたでしょう？ ハルくんはこれから、『治療』のためにおむつをつけなくちゃいけないの。でも、おちんちんが大きくなってたらおむつを当てられないから、医療的措置としてやむなく、こうして性的欲求を鎮めてあげてるのよ」

「そ、そんな、無茶苦茶なっ……!」

先ほどまでの真面目そうな顔はどこへやら、看護師は完全に仮面をかなぐり捨て、舌なめずりせんばかりの笑みを浮かべている。口先とは裏腹に、欲求を鎮めるどころか、いっそう昂らせようとしていた。

ハルは必死で抵抗を試み、

「ち、『治療』のためっていうから、おむつは我慢しますけど……こんな、や、やめてくださいっ……! 少し待ってくれれば、落ち着きますから……!」

「ふふっ、そんなに嫌がらなくなっただっていいじゃない。せつかくなんだから遠慮なく、気持ちよくなるといいわ。心配しなくても大丈夫よ、お母様には、黙っておいてあげるから」

「そ、そういう問題じゃ、ありませんっ……!」

「あら、じゃあ何が問題なの？ 遠慮なく気持ちいい思いをすればいいじゃない。ほーら、こうして」

「ひゃっ!?!」

看護師の指が、亀頭の裏側にあるコリコリとした場所を圧迫する。敏感な部分を押し潰されて、ハルの口から悲鳴が上がった。

息もつけないほど強烈な快感に身悶えていると、

「ふふっ、次はこんなこと、しちやおうかしら」

そういうなり、看護師はすぼめた手のひらでハルの陰茎を包み込み、すると上下にしごき上げた。

「ひあっ、や、やめて……」

「んー？ やめてほしいの？ でもこっちは、やめて欲しがっているようには見えなによ？」

ハルの抗議などお構いなしに、看護師はくすくす笑って手を動かす。亀頭の先端をつくと、その指先がぬるりと滑った。

「ほら、こんなに我慢汁を出しちゃって。我慢するのはよくないって、先生もおっしゃってたでしょう？ さ、遠慮しないで」

「や、やだ……ぼくは、そんなっ……!!」

「ふふっ、生島くんったら、すごくうぶなのね。男の子なら、エッチなことに興味があってもおかしくないでしょうに。それとも——誰か、好きな人でもいるのかしら？」

看護師の揶揄に、ハルは耳まで真っ赤になる。

「あらあら、凶星だったみたいね。大丈夫よ、これはただの『医療行為』なんだから、その子を裏切ったことにはならないわ」

「だ、だからって、こんなこと……!!」

「強がり言っちゃって。でもほら、もうそろそろ、出るんじゃないかしら？」

「い、いやっ……やめてっ……」

ハルはまるで強姦されている少女のように、口元に手を当て、潤んだ瞳で看護師を見た。しかしそんな懇願の表情は、かえって雌豹のような看護師の嗜虐心をいっそうそそるだけにすぎないことに、ハルは気付いていなかった。

看護師は獰猛な笑みを浮かべて、指先が触れるか触れないかくらいの強さで、痛々しいほど勃起したペニスをしごき上げる。

くちゅっ、くちゅっ、

女性特有の冷たい手が、劣情に燃える竿を包み込み、ゆっくりと上下に動き始める。

どちらも天然のローションに濡れているため、痛みは全くない。寒気にも似た快感が、背筋を走り抜けるだけだ。それがかえって、ハルにとっては屈辱的だった。

「ひ、だ、だめ、こんなっ……」

お尻の下には、柔らかいおむつ。

それを感じながらペニスをしごかれる背徳感に、ハルは奥歯を噛みしめ、必死で射精する

まいとする。

しかし――

「ふふっ、いまにも出そうじゃない」

ペニスは今や、平均的な少年のサイズにそそり立ち、天井を睨んでそびえ立っている。亀頭は赤熱して、竿の根元までが先走りに濡れそぼり、まるで奇怪な肉華のようであった。

「うあっ、もう、出る、出ちゃうっ……」

「いいのよ、出しちゃっても」

看護師の声が、囁くように小さくなる。催眠誘導にかけるような口調で、

「このまま気持ちよく、出しちゃいなさい。だって、そうしないとおむつを当てられないんだから。『治療』のためには仕方ないことなのよ。ね、そうでしょ？」

「ち、『治療』……」

「ええ。生島くんは、病気なの。それを治すためには、こうするしかないのよ。ぜんぜんおかしくなんてない、当たり前のことなの」

「治す、ため……」

先ほどまでの責め口調とは違い、まるで優しく解きほぐすような声色が、ハルの心から理性を奪い取っていく。目から力が消え、夢うつつといった表情だ。

「そう。恥ずかしがる必要なんて、何もないのよ。生島くんは病気なんだから。これは、『治療』のためなんだから……」

甘い声とともに、看護師の指がいよいよ本格的に竿を掴んだ。親指と人差し指で輪を作り、上下にゆっくりこすり上げる。

くちゅり、くちゅり、

くちゅり、くちゅり、

「あっ、あっ、ああっ、ああっ……」

手の動きに合わせて、ハルの腰が躍る。

ペニスがひくひくと痙攣し、我慢汁が潮吹きのように飛び散った。

「気持ちいいでしょ？ なら、もうイっちゃいなさい。何も怖がらなくていいの。ただ気持ちよくなれば、それでいいのよ。さあ、イってー！」

「もうだめっ、あっ、いくっ、イっちゃうっ……」

「いきなさいっ！ ほら、いくわよっ、いくっ、いくっ！」

声と同時に、手の動きが一気に加速した。

くちゅくちゅっ、くちゅくちゅっ、

「あらあら、泣き出しちゃったわね。本当に、赤ちゃんみたい。さ、おちんちんも赤ちゃんみたいになったところで、ちゃんとおむつを当ててあげないとね」

看護師は何事もなかったかのように、おむつを当てる作業を再開した。

ペニスを下向きにしておむつを被せると、左右に渡したおむつごと横羽をマジックテープで固定し、その上から前当てをあてがう。

(ああ……)

おむつの感触が、下腹部全体を覆う。ドビー織の布おむつはふんわりと柔らかいくせに、どこかざらりとしていた。

両脇のスナップボタンを一つ一つ、大きな音を立てて止め、おむつカバーの外にはみ出した布おむつを、内側に押し込んでいく。

そして、五分後――

「うん、できたわね」

満足そうに言う看護師の前で、ハルはベッドのへりに腰掛け、自分の体を見下ろしていた。着せられているのは、ピンクのパジャマの上だけ。それも、先ほどまで来ていた病院用のパジャマではない。チェック柄で襟にはフリル、ボタンの脇にはピンタック、胸元で切り替えになっているためAラインにふんわりと広がり、袖口と切り替え部分にレースがあしらわれた、少女向けのパジャマであった。

サイズはぴったりだが、もちろんその丈はワンピースほど長くない。裾からは、ウサギプリント柄の布おむつカバーが覗き、内側にあてたおむつで膨らんでいるのがはっきりわかる。ズボンも穿ければよかったのだが、腰回りがこれほど膨らんでいては不可能で、けっきよく赤ちゃんのようにおむつカバーを丸出しにしているのだった。

(こんな――一人にもなって、おむつの取れない赤ちゃんみたいな扱い……!)

さらに前髪も、少女のように切りそろえられてしまっている。そうするとどこをどう見ても高校生とは――まして男子とは、思えない外見になってしまった。

覚悟していたこととはいえ、あまりにも恥ずかしい事態に唇をかみしめていると――

「着替えは終わったかしら？」

病室の外から、心理カウンセラー・長谷部志保の声がした。看護師はすぐに、

「はい、終わりました」

「ご家族をお通ししても？」

「ええ、大丈夫です」

ハルが制止する間もなく、長谷部志保が病室に入ってきた。その後ろには、冬美と、冬美に抱かれたアキの姿もある。

「ハルくん……」

「息子」の変わり果てた姿に、目を丸くする冬美。

その視線に耐えきれずに、ハルは目を逸らした。

(冬美先生に、こんな姿を見られるなんて——)

いつの間にか起きたのか、アキのきやつきやとはしやぐ声が聞こえる。まだ、目の前で可愛いパジャマを着ているのが自分の兄だと認識していないのだ。

「ご覧のとおりです、お母さん」

そんないたたまれない空気を意にも介さず、長谷部志保は冷徹な口調で言った。

「ハルくんにはこれから、しばらくこの格好で生活してもらうことになります。つまり——アキちゃんと同じように、おむつの取れない、赤ちゃんとして」

「赤ちゃん……」

「ええ。お母さんは、息子さんを完全に赤ちゃんとして扱ってあげてください。おむつを取り替えてあげたり、ガラガラであやしてあげたり、おっぱいを吸わせてあげたり」

「は、はい、判りました……」

さんざん反対していた冬美も、息子の姿を見てかえって決意が固まったのだろう。こわばった表情でうなずくと、腕の中のアキを揺する。

長谷部は今度はハルに視線を向け、

「ハルくん」

「は、はい」

「ハルくんも、これからは赤ちゃんとしてふるまわなければいけません。排泄はすべておむつにして、赤ちゃん言葉をしゃべって、ミルクを飲んで、はいはいして、ね」

「わ、判りました。でも——」

「まだ何か、不安なところがあるんですか？」

「赤ちゃんとしてふるまうなんて、具体的にどうすればいいか……」

ハルが言うと、志保は小さく笑った。

「簡単なことですよ。すぐ近くに、最適な観察対象があるでしょう？」

「最適なんて、まさか——」

ハルは、冬美の腕にいるアキを見た。

冬美も、自分の腕にいるアキを見た。

長谷部志保はそんな二人を交互に眺めてから、うっすらと唇を笑みの形にゆがめ、

「そのとおり。アキちゃんとおそろいの生活を送る——そうすれば、ハルくんの病氣もきつと治りますよ……」

妹と「おそろい」の生活——それがいったいどのようなものになるか、ハルは恐怖と、不安と——そして一抹の甘美な毒にも似た戦慄に、身を震わせたのだった。

(試読版は以上となります。続きは製品版でお楽しみください)